

君が美味しそうに見えて
たまらない

絲織

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

粗筋

週に一度は人肉を喰らわないと生きていけない高校生――通称、屍喰鬼に取り憑かれた氷川赤琉が、近頃巷を騒がせる連続殺人事件の犯人だと名乗る大学生の零崎人識と出会い、歪み歪んだ不可思議な関係が始まる。??原作完全無視。ほぼオリジナルストーリー。??背の小さい人識くんかわすぎ。隠れて密かに厚底ブーツ履いてたらいいな。

※捏造箇所満載なので不快な方は閲覧をご遠慮下さい。

序章

目次

1

序章

”零崎”のことはなんとなく知っていた。

裏社会では結構名の知れた、謎の暗殺集団の称号。でもまさか、本当に実在するとは思っていなかったし、存在するとしても秘密裏に活動するものだと思っていたばかりに、今回の件について、少しの間、心臓や脳が機能を停止させるくらいに動揺があった。でも、零崎であるにしろ、そうでないにしろ、とにかく人殺しの現場に遭遇したことは初めてだった。

ただの気まぐれで、思いつきの散歩中。受験生特有の披露をどうかしよう、気分転換のために家から少し離れた喫茶店を訪れた帰り。今日は、朝の ”栄養補給” のお陰で少し……いや、結構気分が良かった。六日ぶりの極上の味を味わったその日の、日が沈む直前。夕暮れのことだった。無惨にも刻まれた男の死体の向こう側に、私と対峙する一人の男。背は低く、とは言っても私より高いが……小柄な体格のせいだ。幼げのある、可愛げのある容姿をしている男。私の滅多に当たらない”感”からして私より年上で、世界の”いろいろ”を知っている男。

その男、は、衝撃を受けたような私の顔を見て、ニヤリと笑うのだった。不思議な模様を付けた白髪を風に揺らし、頬にあるこれまた不思議な刺青を歪めて、ただ笑うのだ。きつと男は、殺人現場を見られてしまった、ではなく、また殺せばいい、と思つてしまえるような、常人には理解できない思考回路をお持ちのようだ。だからニヤリと笑うのだ。これから殺されようとしていることを冷静に予期、というか、未来予知した私は、正直に告白すれば、”通りすがりの殺人鬼に、あつけなく殺される自信がない” というのが今の心境であり、それが私という人間にとつて、全てである。説明すれば長くなるので割愛するが、だが、そうして今、こうして対峙する男は、得体の知れない謎の自信を持つ私を見て、ニヤリと笑うのだ。おもしろいとか、楽しめそうだ、とか、そんな変なことを思っているに違いない。むしろ私は ”殺せるものなら殺してみろ” 側の人間であるため、相手がどう思っているのかは、結局のところはどうでもいいのだ。それではいったい私が、何に怯えて、驚いているのかというところ。

「かはは！　　これまた奇妙な客人だな」

男が、『私が殺人現場を目撃したこと』と、『私がすぐに逃げ出そうとする素振りを見せないこと』と、『私が男に殺されるかも知れないと予想したうえで、そうであつてほしい、と思つたこと』等々、私の全てを感じ取つて、それでもつて、ニヤリと笑つたことだった。